

富大考古通信



第20号

若狭にて

今年の研究室旅行は、福井県、若狭・越前を訪ねました。1日目は、若狭歴史博物館、若狭国分寺、白鬚神社古墳、下船塚・上船塚古墳、十善の森古墳、若狭町歴史文化館、上ノ塚古墳と巡り、宿は三方五湖のひとつ水月湖の湖畔にとりました。2日目は、若狭三方縄文博物館、鳥浜貝塚、越前陶芸公園、一乗谷朝倉氏遺跡と巡り、福井市内泊。3日目は、足羽山古墳にのぼり、時間に余裕ができたため急遽福井市郷土歴史博物館に立ち寄り、福井県立歴史博物館、白山平泉寺、丸岡城の見学と充実した旅行になりました。各地の資料館、博物館、教育委員会の方々には、今年もたいへんお世話になりました。この場を借りてあらためて御礼申し上げます。多数の前方後円墳や遺跡、遺物の見学に加えて、福井県立歴史博物館では博物館資料の収蔵・展示にかかわる具体的なお話を伺うことができたのも大きな収穫でした。

私事ですが、若狭は1987年に大学での研究室旅行という行事を初めて経験した土地になります。その縁で若狭町（当時の上中町）にある向山1号墳という前方後円墳の発掘調査に参加することとなり、研究室の近い学年の人たちと87年・88年のふた夏を若狭で過ごしました。1年目は墳丘を、2年目は石室と武器埋納坑などの調査をおこないましたが、私自身初めての古墳の調査でしたので、たいへん貴重な経験となりました。今回の訪問では、現地を再訪することはできませんでしたが、若狭歴史博物館で多くの出土遺物と再会することができました。

翌日の若狭三方縄文博物館で伺ったお話と鳥浜貝塚を中心とする展示は、いずれも興味深いものでしたが、なかでも水月湖の「年縞」によると、始良丹沢火山灰（AT）の年代が30009年前になるというお話には衝撃を受けました（若狭三方縄文館『世界のものさし 水月湖年縞』2014）。

広域火山灰として著名なATの噴出年代は、1970年代には2.1～2.2万年前と求められました。私が最初に学んだ頃の年代もこれに近いものだったと記憶しています。しかし、近年では様々な測定法により2.8～3.0万年前とされ、測定法や表記法にちがいがあるので一概には言えませんが、旧石器時代の概説書などでもこうした従来に比べてより古い年代が記されるようになっていたからです。

「年縞」は1年に1枚ずつ堆積物の層が形成されることでつくられる縞模様の中で、水月湖では「奇跡の湖」とよばれる環境的な特性から、湖底に良好な年縞が保存されています。水月湖の年縞は、氷河期には1枚が約0.6mm、その後の暖かい時代には1.2mm程の厚さとなりますが、これが45m分、時間にしておよそ7万年分堆積していることが確認されています。そして、この中にATの堆積層が位置づけられたこととなります。このような水月湖の年縞がどのように形成され、なぜ良好な状態を保っているのか、またどのように調査・研究がなされてきたのかについては、昨年たいへん読みやすい図書が出

版されましたので、是非一読してみてください。考古学の年代の基礎となる放射性炭素年代や年輪年代との関わりについても丁寧に説明されています（中川毅『時を刻む湖 7万枚の地層に挑んだ科学者たち』（岩波科学ライブラリー242、岩波書店、2015））。

（次山 淳）

目次

若狭にて

次山淳

卒業論文要旨

「縄文時代におけるコハクの流通—東日本を中心に—」

藤井奎臣

「富山県小竹貝塚における玦状耳飾の研究」

矢野実沙希

「富山県における弥生時代中期～古墳時代前期の赤彩土器の研究」

奥 勇介

「新潟県における方形周溝墓・円形周溝墓の研究」

西脇悠生

「長野県東信及び中信地方の馬具と馬具出土古墳の様相—主に松本、上田、佐久盆地の古墳時代 馬具及び馬具出土古墳の性格について—」

上野詩織

「北陸における古墳時代の副葬玉類の研究—玉類の組成による時期的・地域的検討—」

山口七奈枝

「中世の北陸の山城における水利施設についての研究」

高見淳人

卒論発表会と追いコンのお知らせ

編集後記

卒業論文要旨

縄文時代におけるコハクの流通—東日本を中心に—

藤井奎臣

今回自分が取り上げたテーマは、「縄文時代における、コハクの生産・加工方法及び流通ルートの解明」である。取り上げた理由は縄文時代出土コハクについて集成されているものはあるが、明確にコハクの流通ルートについて言及、あるいは地形を踏まえて考察された論文が少ないと感じたためである。

コハクの分析については、相京氏の「縄文時代におけるコハクの流通(上下)」(相京 2007)という論文を参考にして、出土時空的区分、出土コハクそのものについて、出土遺跡について、出土状況について、それぞれ分析を行った。東北地域と関東・中部地域において、出土量の差が大きく出てしまい、そのままでは全体的なデータとしては不十分になった。よって、50点以上コハクの原石や破片が出土した遺跡に関しては除外したデータを作成することで、元データと組み合わせて考えることにした。全体の出土数を見ると、縄文時代前期末葉から中期中葉にかけて最盛期であったことがうかがえる。また、コハク成品と原石や破片との出土量にも大きく差が出た。分析の結果を、地域別にまとめたことで、コハクの形態、遺跡の種類、出土状況別にそれぞれの地域において差異が見られることが判明した。

分析結果を踏まえて、コハクの流通ルート確定を図ると、久慈を主要産地とする東北ルートと、銚子を産地とする関東中部ルートに凡そ分けられることを明らかにし、それぞれの時期ごとにまとめた。しかし時期によって出土量に差が生じるため、コハク単体での流通ルート確定はできない。そのため、コハクの交換財として、黒曜石とヒスイを挙げることで、流通ルートに確証を持たせることを考えた。その結果、東北ルートに関しては確証が得られなかった。というのも、糸魚川産のヒスイがどの経路で東北まで流通したのか、判明させることが難しいからである。日本海を舟で渡ったことも考えられる。関東・中部ルートに関しては、コハクの産地が判明しているものを踏まえて、交換財と比較しほぼ流通ルートが確定されたと思われる。ここまでのことを踏まえて、ヒスイ⇔(黒曜石)⇔コハクという流通ルートがあったものと考えられることは可能であるが、コハク玉あるいはヒスイ玉と黒曜石が同等の価値で取引されたかについては疑問が残った。コハクに関して言えば、コハク原石や破片が消費財として当てはまるものの、コハク玉・ヒスイ玉は貴重財あるいは奢侈財としての価値があり、日常的な消費財であろう黒曜石とは釣り合いがとりにくいのは明白である。黒曜石を貨幣のように扱い、玉各種1個に対して多量の黒曜石で取引を行うことで釣り合いを保ったのかもしれないと考えた。

生産方法についてほとんど調べることができなかったことが反省点である。よって今後の課題はコハク出土数が増加することを前提とし、その加工方法の確定であろう。

富山県小竹貝塚における玦状耳飾の研究

矢野実沙希

富山県の中央部に位置する小竹貝塚は、縄文時代前期後葉を中心に営まれた遺跡であり、「日本海側最大級の貝塚」として知られている。近年、北陸新幹線建設に伴う発掘調査を終え、小竹貝塚が大集落であったことを物語る資料の数々が検出されている。

当遺跡における出土遺物の中でも、石製玦状耳飾は縄文時代前期を代表する装身具で、富山湾沿岸で盛んに製作された石製品である。富山県では多くの出土例が確認されており、比較資料も豊富である。また、小竹貝塚は、層位ごとに多量の石製玦状耳飾が検出されていることから、編年をはじめとした研究にとって良好な資料であると考えられる。

そこで、本論では、出土遺物の中から石製玦状耳飾を対象とし、遺跡内での形態や製作技術、使用石材などの変遷を明らかにすることを目的とした。

対象とする資料は、2009、2010年の発掘調査において出土した玦状耳飾 216 点である。実測図が公開されていた 28 点に加え、未報告資料 188 点に関しては、富山県埋蔵文化財センターにご協力いただき、全資料の観察と欠損が激しいものや小片を除いた 151 点を実測した。そして、これらの資料における各部位の計測、観察、石材の色調から分析を行った。

分析の結果、小竹貝塚出土玦状耳飾の平面形は円形、縦長の楕円形、横長の楕円形という 3 種類が存在したが、円形と縦長楕円形は小型～大型のものまで確認できることに對し、横長楕円形は大型品のみに限られることが明らかになった。さらに、中央孔の位置や切目長さから 8 種類の形態に分類することができた。遺跡内で主体をなすのは円盤状であり、前期中～末葉の全期間を通して製作・使用され続けている一方、環状や縦長・横長楕円形は常に存在する形態ではなかった。しかし、小竹貝塚においては当初から様々な形態が並行して存在しており、遺跡の出現期が、環状から円盤状、楕円形へと形態が変化する縄文時代前期中葉～後葉にあたるため、いくつかの形態が同時に製作・使用されていた可能性が指摘できる。

製作に関しては、遺跡特有の製作工程や技法は見られず、一般的な方法が用いられていた。しかし、使用石材に着目したところ、滑石は最も多く、ほとんどの形態に用いられるが、透閃石岩は縦長楕円形、霰石は横長楕円形との関連性が強いことが判明した。また、一部の時期では、何らかの理由によって霰石や一部の滑石といった白色系の色調を呈する石材を意図的に使用していた可能性があるかと推測できた。

しかし、本論では、出土層位を特定することができなかつた資料が多数存在し、すべての出土資料から小竹貝塚における玦状耳飾の特徴を捉えることができなかったため、形態変遷については検討の余地を残している。また、一部の石材と形態が関連付けられていた要因については、使用者の立場や性格の違い、他地域からの搬入品であることなどが考えられるが、検討することができなかつた。そのため、富山県内あるいは他地域出土資料との比較を行い、小竹貝塚出土玦状耳飾の詳細をより明確にすることを今後の課題としたい。

赤彩土器は、赤色顔料により赤く彩られた土器を指し、全国的に縄文時代よりみられ、主に祭祀的性格を有する土器として捉えられてきた。赤彩技法は、弥生時代早期に大陸から北部九州にスリップ・赤磨き技法が伝播することで大きく転換する。この技法は弥生時代前期には畿内、中期には東海・信州・関東へ伝播することが知られ、各地域での赤彩土器発展の契機となる。北陸に注目すると、特に富山県では土器全般の中での赤彩土器の位置づけが不明瞭な状態にあり、本論では富山県への赤彩技法の伝播過程及び赤彩土器の位置づけについて検討することとした。研究対象時期は弥生時代中期～古墳時代前期とした。

研究方法としては、北陸での従来の土器編年から、研究対象時期を10期に区分し、赤彩土器出土遺構の性格や赤彩器種、赤彩文様（彩文）の変遷を追う。これらの作業の中で、富山県内各地域の赤彩土器の出現期及び変化の画期を捉え、その背景について考察する。そして赤彩土器出土遺構の性格を考慮しつつ、土器様式の中での赤彩土器の位置づけを考える。

本論を作成するにあたって確認した弥生時代中期～古墳時代前期の遺跡は富山県全体で189遺跡あり、この内、87遺跡が分析対象となり得た。

分析の結果、富山県では弥生時代前期に赤彩土器がみられるが、その後は空白期間をおき、中期中葉の新相に高岡地域で再び出現することが明らかになった。石川県で同時期頃の赤彩土器が数点みられることから、弥生時代前期に畿内へ伝播した赤彩技法が近江・北陸南西部を経由して富山県に到達した可能性を考えられる。富山県内では、中期後葉に信州栗林式の模倣品で赤彩土器が1点確認できることから、信州「赤い土器」の影響をこの段階に受けていた可能性もある。後期前半の土器様相は不明瞭な点が多いが、富山県内の多くの地域でこの時期には赤彩土器が出現する。後期後半には石川県法仏式において有段口縁器種への赤彩が目立ち、富山県においても同時期に有段口縁器種への赤彩が確立することから、法仏式の波及が関係していることを理解できる。吉備・畿内・東海に類例を求められる彩文もこの時期にみられる。また、出土遺構の観点から、赤彩土器の祭祀的性格が確立する段階と言える。終末期には特に彩文の観点で、富山県内において地域性が形成され、赤彩土器の祭祀的性格が顕著化する。古墳時代前期に至ると、外来系土器が主体となる土器様式の変化に伴い、赤彩器種も小型丸底壺や小型器台等で構成されるようになる。さらに、赤彩土器の主体的用途は古墳祭祀へと移行する。

以上より、富山県内の赤彩土器は土器様式の変化と多くの時期において関係性を有し、土器全般の中でも祭祀的性格の強いものとして位置づけられていたことが理解できた。

今後は在地社会・周辺地域との関係性について深め、赤彩土器の位置づけについて更に検討していくことが課題である。

方形周溝墓は、おもに溝によって墓域を画す墓制であり、その形態は方形の形状を基本とする。周溝の形態は四隅に陸橋をもつものや全周するもの、中央に陸橋をもつものなど多岐にわたる。また、周溝が円形状を呈する円形周溝墓も存在する。これら形態は、弥生時代前期末を初現とする東海地域の四隅切系方形周溝墓や畿内地域の全周系・中央陸橋系方形周溝墓など地域によって異なる形態を示す。

今回本論では新潟県の方形周溝墓を取り上げ、近年新たに発掘された資料も含め、15遺跡65基の方形周溝墓・円形周溝墓を分析対象とし、その伝播の在り方や北陸・信濃など他県との受け入れ方の違いなどを検討した。

分析方法としては、各遺構の周溝の平面形態や周溝墓の内径の規模といった個別的形態、周溝墓の出土遺物、周溝墓同士の群構成といった大きく3視点から分析した。

結果として新潟県における方形周溝墓・円形周溝墓の伝播ルートはその形態に合わせて様々なパターンがある可能性が分かった。

1つ目は弥生時代中期中葉の四隅切系方形周溝墓である。これは、小松式土器の波及に伴うものと考えられるが、群構成などから北陸と同調しない様相もある。さらに、方形周溝墓出土遺跡の出土遺物から北信濃や西日本との関係も示唆されることもいえる。

2つ目は弥生時代後期前半の中央陸橋系方形周溝墓である。この時期の北陸・信濃に類例はなく、伝播ルートははっきりしない。現状、在地のものである可能性や近江において弥生時代後期前半段階までに坊袋遺跡や柿堂遺跡で中央陸橋系方形周溝墓がみられることなどから、北陸を飛び越えた可能性が考えられるが、どちらも考え難いものであり、中央陸橋系方形周溝墓が検出された奈良崎遺跡の時期設定も含めさらに検討が必要である。

3つ目は弥生時代後期後半の円形周溝墓である。これは、その形態から信濃の円形周溝墓に起源をもつものと考えられる。円形周溝墓検出遺跡では、玉や鉄剣の出土がみられ信濃と交易の可能性が高い。威信財と考えられるこのような遺物に対して、これら遺跡で中部高地系の土器がほとんどみられないことから、首長間レベルでの交易であったと考えられ、その中で円形周溝墓も流入したものと考えられる。

4つ目は古墳時代前期の円形周溝墓である。後期後半の円形周溝墓と違い、規模・周溝幅などが大きい特徴がある。また、陸橋部を持たない特徴などから円墳の可能性もある。このほかにも屋鋪塚遺跡から丹後との間接的な関係も考えられるなど新潟県における方形周溝墓・円形周溝墓は北陸・中部高地・西日本など様々な要素が入り組んでいることが分かった。

今回の論考では奈良崎遺跡の中央陸橋系方形周溝墓や古墳時代前期の円形周溝墓がどういったルートで新潟へ流入したのか具体的な案を提示することができなかった。特に中央陸橋系方形周溝墓は北陸を飛び越えた検出であり、検討していく必要がある。

長野県東信及び中信地方の馬具と馬具出土古墳の様相

—主に松本、上田、佐久盆地の古墳時代馬具及び馬具出土古墳の性格について—

上野詩織

我が国に大陸から乗馬の風習が伝えられたのは、半島への出兵が行われた4世紀末から5世紀初頭にかけてと考えられており、6世紀から7世紀にかけて馬具は古墳に副葬されたと推測されている。しかし馬具はその制作にあたって金属工、木工、革工、漆工など当時の技術が総合的に結集されたものであり、入手し古墳に副葬できたのは一部の権力者、もしくは馬匹生産が盛んであった北九州地方、長野県や群馬県のような東国地方の実力者階級であったと考えられている。特に長野県では、北信地方や南信地方の伊那谷において古墳時代を通じて多くの馬具が古墳に副葬された。

今回はその長野県内において古墳時代馬具の出土量が少ないとされる長野県中央部の地域を対象とし、当地方から出土する馬具の様相、そして馬具出土古墳の被葬者の実態について明らかにすることを目的とした。

分析の対象は長野県中央部の俗に東信地方、中信地方と呼ばれる地域に所在する古墳21基で、分析対象遺物は轡（くつわ）、鐙（あぶみ）、杏葉（ぎょうよう）といった各種馬具である。分析の方法として、各種の馬具について形態などから形式分類を行い、須恵器等の共伴遺物から年代と副葬時期の特定を行い、それらのデータと古墳の形、規模、所在地などを関連付ける方法を用いた。

分析の結果、副葬された馬具については鉄製轡が圧倒的に多く、実戦向きの粗雑なものが多かった。しかし、金銅装を施した馬具も少数ながら存在し、中には同じ古墳群内で同時期に埋葬が行われた古墳でも金銅装の馬具を副葬するものと鉄製の馬具を副葬する2種類が存在し、金銅装の馬具を入手することが可能な被葬者とそうではない被葬者の両方が存在していたとも推測できる例も見られた。

副葬時期についてみると、当地域では6世紀後半代に入るまで馬具の副葬は行われず、県内の他の地域よりも馬具の副葬が大幅に遅れたことが分かった。6世紀後半代になると、それまで馬具の副葬において優位性を保っていた下伊那地域において馬具の副葬が沈静化し始めるとされており、その動きに連動して当地域の古墳にも馬具が副葬されるようになっていく動きが確認できた。しかし、当地域における馬具の副葬は7世紀代中頃には沈静化しており、その期間は他地域における馬具の副葬期間と比べると短いものであったとみられる。

今回の研究において他副葬品や石室構造などについての分析がおざなりになってしまったこと、下伊那地域や北信地方など本地域以外の馬具及び馬具副葬古墳の分析・考察の大部分を先行研究において補ってしまったことを今後の課題としたい。

玉類は、装身具や祭祀具、及び刀装具として存在している。古墳から出土する玉類については、これまで玉類の変遷や被葬者の性格などが検討され、明らかにされてきた。しかし、従来の研究では取り扱われる資料が畿内をはじめとする西日本中心であり、各地の主要な古墳に限られたものであった。

富山県・石川県では古墳の発掘や古墳に関する研究が進んでおり、その中には玉類が出土する古墳も多数含まれている。そのため富山県・石川県において、近年の発掘成果や古墳編年研究を踏まえ、古墳時代前期から後期までを対象とした古墳出土玉類の様相を明らかにしたいと考えた。

分析の対象とする遺跡は、越中、加賀、能登に所在する計 51 基の古墳で、管玉、勾玉、丸玉、小玉、臼玉、平玉、空玉、棗玉、三輪玉、算盤玉、切子玉など各種の玉類を分析の対象遺物とした。分析方法は、まず古墳時代前期から後期までの期間を対象として、材質・形態ごとに玉類の種類を分類し点数を調査した後、玉類出土古墳の共伴遺物などのデータから、玉類の副葬時期の推定を行った。そして組成表と玉類出土古墳の分布図を作り、古墳出土玉類の変遷を明らかにすることで、時期と地域による違いを考察した。また、古墳の規模ごとにみた玉類出土状況を明らかにすることによって、玉類の階層性について検討した。

分析の結果、滑石製玉類が出現し、瑪瑙製勾玉がみられるなど材質・形態の種類が増える時期は 5 期に越中、6 期に加賀、5 期に能登で確認でき、碧玉製・緑色凝灰岩製管玉が再びみられるようになる時期は、8 期に越中、9 期に加賀で、9 期に能登で確認できた。古墳時代になると玉類は、製作地との遠近に関係なく供給され始め（河村 2010）、大和政権から分配されたと推測すると、越中・加賀・能登の 3 地域のうち西側に位置する加賀で第 1・2 画期とも遅れている理由は、未発掘の古墳から玉類が検出される可能性があるためと考えられる。

階層性については、墳丘規模が大きくなるほど玉類出土数が多くなるといったような傾向は見ることができなかった。また、階層性があるとされる碧玉製管玉は、前期から後期までを通して墳丘規模に関わらず出土している。そのため、富山県・石川県において玉類は階層性には強く影響されていないのではないかと考えた。しかし、碧玉製・金属製の三輪玉や金銅製の空玉は、比較的規模の大きな前方後円墳から出土する例や、有力首長のみが持つことのできる副葬品と共に出土する例がみられることから、材質や形態による違いについては検討の余地がある。また、今回は年代や材質分類を報告書に頼っており、その厳密性について検討することや、福井県を含めて北陸全体の様相を明らかにすることは今後の課題である。

軍事的な性格をもつため、必然的に城郭には共通して防御施設が構築されることになる。その一方で、城郭を使用する兵士の立場に立った場合、生きていくためには水が必要不可欠であるが、井戸が見られる城は少ないように思える。また、城郭における井戸等の水利施設に関する研究は、他の城郭遺構に関する研究に比べるとあまり進んでおらず、北陸地方を対象とした水利施設の研究もほとんどなされていない。そこで、本稿では城郭内における井戸等の水利施設について研究を行う。

今回は客観的な視点から検討を行うため比高差が 70m 以上の 205 城を山城として扱い、その内水利施設をもつ 23 城を研究の対象とした。

分析の方法として富山県、石川県、福井県の山城の内、水利施設をもつ山城の規模の比較、水利施設が構築される城内の位置の検討、平地に築かれた城館と山城における井戸の規模の比較を行う。

分析の結果、規模の比較からは富山県、石川県、福井県の 3 県では様相がそれぞれ異なっていることが明らかになった。

山城内に設けられる井戸の位置としては、主郭あるいは主郭に近い郭に設けられていることが明らかになり、軍事的な理由によるものであると考えられる。また、城自体の規模が小さい場合、一般的に山頂に設けられる主郭あるいは主郭付近の郭は城内で最も広い郭となるため、わざわざ山の中腹に郭を造成して井戸を掘るよりも手間がかからないという普請時における能率性を考慮しているとも考えられる。また、井戸が主郭に設けられた山城の比高差に注目すると他よりも小さい山城が目立つ。そのため、城を築く際に麓から見上げた時に、山頂が低い場合は主郭に井戸を設けていた可能性を指摘できる。

平地城館との比較では、平地城館における井戸は直径が全て 3.0m 以下であり、そのほとんどが 2.0m 以下であるのに対して、山城における井戸は直径が 3.2m 以上のものが半数を占めている。このような差異は山上や丘陵頂部と平地という立地によるものであると考えられる。平地城館では比較的短時間で井戸をいくつも掘る、あるいは新しく掘り直すことができるのに対して、山城では平面規模を大きくすることで数を補おうとする意識が働いていたのではないかと考えられる。

水利施設をもつ山城は富山県が 14.8(8.6)%、石川県が 9.4(3.8)%、福井県が 8.6(5.7)%となっており(0内は井戸をもつ山城)、2 割以下でしか水利施設がみられない。そのため、水利施設を構築することは当時、少数派であったとも推測できる。

以上により水利施設をもつ山城は占める割合が小さく、地域によって様相が異なり、平地城館とは立地による井戸の規模の差異が存在するところが理解できた。今後の課題としては、遺構や遺物から時期について明らかにすることや、広範囲の地域を対象として地域間の差異を検討することが挙げられる。

平成 27 年度富山大学考古学研究室卒業発表会

日時：2016 年 2 月 28 日（日）13 時～

場所：富山大学人文学部 2 階 第 4 講義室

当日のスケジュールは以下の通りです。（順番が入れ替わることがあります。）

聴講は無料で、申し込みは不要です。皆様ふるってご参加ください。

お問い合わせ等がございましたら 076 - 445 - 6195（富山大学考古学研究室）もしくは
tomidai_kouko@yahoo.co.jp までご連絡ください。

【卒業論文】

- ①藤井奎臣「縄文時代におけるコハクの流通—東日本を中心に—」
- ②矢野実沙希「富山県小竹貝塚における玦状耳飾の研究」
- ③奥 勇介「富山県における弥生時代中期～古墳時代前期の赤彩土器の研究」
- ④西脇悠生「新潟県における方形周溝墓・円形周溝墓の研究」
- ⑤上野詩織「長野県東信及び中信地方の馬具と馬具出土古墳の様相—主に松本、上田、佐久盆地の古墳時代 馬具及び馬具出土古墳の性格について—」
- ⑥山口七奈枝「北陸における古墳時代の副葬玉類の研究—玉類の組成による時期的・地域的検討—」
- ⑦高見淳人「中世の北陸の山城における水利施設についての研究」

追い出しコンパのお知らせ

春の陽気が待ち遠しい今日この頃、みなさまいかがお過ごしでしょうか。

さて、富山大学考古学研究室では、2月28日（日）の卒業論文発表会の後に追い出しコンパを開催します。ご多忙中かと思いますが、参加していただければ幸いです。

日時：2月28日（日）

場所：一次会…Baresco（バレスコ） 時間 18時30分～20時 会費 7000円

※参加を希望される方は tomidai_kouko@yahoo.co.jp までご連絡ください。

※費用は出席者の人数によって多少前後する場合がありますので、ご了承ください。

※二次会は当日の人数により決定します。場所は未定です。

一次会の場所については、以下の地図をご覧ください。

一次会 Baresco（バレスコ）



編集後記

寒さ暑さも彼岸までと申しますが、まだまだ寒い日が続いております。

2月も終わりに近づき、そろそろ春の足音が聞こえてまいりました。春は先輩方とお別れをする季節、そして新しく2年生を研究室に迎える、うれしくも寂しい季節です。

卒業される先輩方は、富大考古通信に原稿を提供していただきありがとうございました。これから困難も多いかと思いますが、しっかりと自らの道を進んでいかれることをお祈りしております。

今年の春からは、2年生が7人入ってきます。新しい仲間を迎えて、研究室がますます楽しく、そしてみんなで協力して学ぶことができる場となるよう、一同頑張っております。

(蒲生侑佳・泉田侑希)

富大考古通信 第二十号

配信日 2016年2月18日

編集・配信 富山大学人文学部考古学研究室

住所 930-8555 富山市五福 3190

TEL 076-445-6195

留守番アクセス 4000 BOX 番号 6195

HP <http://www.hmt.u-toyama.ac.jp/kouko/index.html>

メール tomidai_kouko@yahoo.co.jp

※メールにつきましては、迷惑メールと識別するため、タイトルに必ず「富山大学考古学研究室」と入力してください。ご協力お願いいたします。